～インクルーシブ教育実現に向けて～

国際理解教育・開発教育を通じたインクルーシブ教育の現状と課題の探求

本研究チームは、‘開発教育・国際理解教育は、インクルーシブ教育に寄与できる’との考えから本研修主題をあげた。

【研究計画】

１年目　特別支援教育における国際理解教育・開発教育の整理
　　インクルーシブ教育の概念の共有

２年目　特別支援教育からみた、インクルーシブ教育の在り方
　　（国際理解教育・開発教育を通じて　実践案、実践事例）

３年目　現場の実践からみたインクルーシブ教育の現状と課題

【研究成果】

～１年目～

・特別支援教育における国際理解教育・開発教育の整理を行った。
（教育的　法的（教育基本法　学校教育法　学習指導要領各文献　特総研資料）
・インクルーシブ教育の整理、概念の共有を行った。
（インクルーシブ教育の範囲　研究対象範囲　）

～２年目～

・実践を積み重ね異学年の児童生徒、障がいの実態に幅のある児童生徒が共に学ぶための工夫（教材、授業展開）の視点を紡ぎだした。
　①　「体験を伴う学習」②「児童・生徒の縦割りグループ」③「実物の使用」
　④「教材提示の仕方（五感に働きかける）」

〇３年目（今年度）の研究の方向について

研究員が所属校でインクルーシブ教育の可能性について実践・考察してきた。今年度は三年目である。小学校の特別支援学級（知的）、特別支援学校（知的、肢体、聾、病弱、等）、対象の児童・生徒の実態や環境が異なる中で、どの校種でも効果的である授業展開、手法の開発を目指して研究を重ねている。

研究計画最後の一年となる今年度は、所属学級や所属校から外に出て、特別支援学校と普通学級との交流や国内・海外の学校間の交流を図り、インクルーシブ教育についてさらに学びを深めていきたいと考えている。

〇研究活動

６月～３月の間で毎月１～２回、定期的に研究会を行い、研究員同士の授業実践について検討、報告、考察を行った。互いに授業を高めることができた。

６月	特別支援教育チーム　第１回研究会　（授業案検討）
８月	第１回研究会　（授業案検討）スタディツアー（フィリピン）
１０月	第２回研究会　（授業案検討）
１１月	第３回研究会　（授業案検討）
１月	第４回研究会　（研究のまとめ検討）
２月	第５回研究会　（研究のまとめ検討）

３月	第６回研究会　（研究のまとめ検討）

過去３年間の研究会、研修会、スタディツアーの様子（抜粋）

【研究発表】

【研究会】

【フィリピンスタディツアー】

【研修会】

【ネパールスタディツアー】

藤原　英二　東京都立Ｂろう学校　小学部１年　準ずる課程 「なかよくなろう」全２時間
＜ねらい＞・学校間交流を行い地域の学校の児童達と交流を深め、お互いに障がいの理解を促進する心情を養うと共に開発教育の手法を用い共に学ぶことができる学習活動を開発する。
＜活動内容＞ ・定期学校間交流を通じて、自分達の学校を地域の小学校児童達に紹介する。 ・開発教育で用いられる参加型クイズ、ゲームを行い交流する
＜児童の様子＞ ・覚えたての学校のいろいろな部屋をクイズ形式で楽しんで紹介していた。（聴力検査室、食堂等） ・ゲーム（なかま集め）では、ゲームをよく理解して積極的に地域の児童達と仲間を作ろうとしていた。
＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開等）＞ ～聴覚障がいのある児童達と障がいをもたない児童達が共に学ぶための参加型学習～ 〇ゲームを実施する際、ゲーム説明にイラストを設けることにより、本校児童のみならず、地域の児童達にもわかりやすくゲームがスムーズに進行できる。（どんなゲームにするかゲームの選択も重要） 〇感想の発表は、全員参加型の手法を用いた。障がいの有無に関係なく共に行動し思いを共有できることがわかった。（体育館の四隅に『たのしかった』『どきどきした』などイラスト付きの気持ちの表すカード用意して今の気持ちのところに集まるようにした）

吹越菜央　東京都Ａ市立Ａ小学校　特別支援学級（知的）１～６年生 「たったひとつの　まあるい　ちきゅう」
＜ねらい＞実物に触れ、五感を使って異文化を体験することで、より興味･関心を高めることができる。
＜活動内容＞ ・実物を用いてモンゴルの言語･お金･遊び･民族衣装などを知り、日本との生活や文化の違いを知る。 ・中庭に建てられた遊牧民の家、ゲルの中に入り、遊牧民生活へのイメージをもつと共に、日本にある物とモンゴル遊牧民の家にある物とを比較しながら他国と自国との生活の違いに気づく。 ・ゲルに住んでいる子どもたちの生活を知り、自分自身の家族の中での役割を考える。 ・調理実習を行い、モンゴルの伝統料理を作って食べ、日本との食材や味の違いを知る。
＜児童の様子＞ ・本物に触れたことで「モンゴルについてもっと知りたい」という思いが高まり、図書の時間に自らモンゴルについて書かれた本を探して読んで、調べる児童がいた。 ・保護者からは「食事作りを手伝うようになった」等の家庭での児童の変化があった。
＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開）＞ 異学年の児童・実態に幅のある児童が共に学ぶための工夫を含めたインクルーシブ教育 ・実物に触れるモンゴルの生活で実際に使われている実物に触れながら体験的に学ぶことで、イメージをもちやすく、実態に幅のある児童がそれぞれの段階に応じて異文化への理解を深めることができる。 ・縦割り活動縦割りグループで活動を行うことで自然と高学年が低学年をサポートしながら学習に参加することができ、異学年同士の交流も深まる。 ・学校公開での全校児童・保護者への公開通常級の児童、保護者に開放することで通常級と支援級の児童同士が交流を深め、支援級の学習がどのように行われているのか知ってもらう機会となる。

清水マヤ　東京都立Ｃ特別支援学校　肢体不自由校　小学部１～６年

「アルミ缶を集めて車いすを途上国へ送ろう」

＜ねらい＞

・身近な物が国際協力につながる活動を通して、児童が外国への興味関心をもつ。

・周りの人との協力をしてできたことの達成感や喜びを感じる

＜活動内容＞

・アルミ缶を集めて換金し、車いす購入にあてフィリピンへ車いすを送ることを大きな目標として活動し始める。ビラやポスターを作成し、友達や自分の周りの人たちに協力してもらいながら活動をする。

・フィリピンの特別支援学級の生徒と交流をし、車いすを送るための準備（自己紹介カード、ビデオレター作成）を児童が主体的となって取り組む。

＜児童の様子＞

・最初は多くのアルミ缶を集めることに不安を感じている児童もいたが、少しずつアルミ缶が集まってきてからは、総量を確認する毎に期待感が高まってきている様子が見られた。

・校外（通院している病院や近所等）にも、自ら呼びかけてアルミ缶を運んでくる児童もいた。

・フィリピンの生徒の自己紹介カードに興味をもったり、自分のカードにも英語で書いたりしたいという児童が出てきた。

＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開）＞

①　小学部全体で行い、普段あまり交流がない低学年と高学年が触れ合うよい機会となった。

②　ビラやポスターを作成・配布することで、児童が主体的に校外の人にも発信しやすくなった。

③　１台の車いすが途上国と本校の児童を結びつける大きなものとなった。

森　裕紀子　　千葉県立Ｄ特別支援学校　肢体不自由校　対象学年：高等部１，２，３年生

単元名「フィリピンのマアシン小学校と交流学習をしよう！」

＜ねらい＞

・異文化に触れ、異文化を知ることで新しいことを知る楽しみを感じることができる。

・フィリピンに日本のことを紹介し、日本の言葉や生活についても再確認することができる。

＜活動内容＞

・自己紹介カードや手紙、自分の国の言葉（日本語・イロンゴ語）、食事（お好み焼き、バナナケーキ）、歌（待ちぼうけ、バハイクボ）についての掲示物などを送り合う。

・フィリピンで青年海外協力隊として活動している方を招聘、フィリピン紹介の授業をしてもらう。

・相手の国に教えてもらった言葉や歌を練習して、ビデオに撮りビデオレターとしてフィリピンに送る。

＜生徒の様子＞

・自己紹介カードや手紙など実物がフィリピンから送られてきたことで、親近感がわき、「フィリピンに行ってみたい！」と言っている生徒が増え、興味をもって積極的に取り組んでいた。

・フィリピンのことを知ると同時に、日本のことについても振り返るよい機会となっていた。

＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開）＞

・手紙の作成は、文字を書いたり、写真を貼ったり、色を塗ったりする学習がある。生徒の個性を一枚の紙に表し、生徒の実態や様々な障害種に合わせた形で取り組むことができる題材だと感じた。

・フィリピンの歌を歌った際は、発語のある生徒はタガログ語で難しいと思われたが、みな一生懸命練習をして歌っていたり、発語が少ない生徒は音楽に合わせて身体でリズムをとっていたりした。歌は様々な障害種の生徒がそれぞれの参加の仕方で学習できる教材だと思われる。

牧　ちさと　神奈川県立Ｅ養護学校　知的　高等部２年２・３グループ

「KARIBU TANZANIA」

＜ねらい＞・タンザニアの生活、文化、伝統に触れたり体験する中で、興味関心をもつ。
・外国の人々に自分達の生活や文化伝統を紹介することで自己発信するとともに、タンザニアに関して得た情報から想像するタンザニアの姿を絵に表現する。

＜活動内容＞・タンザニアの人々の生活や文化の映像を見ながら、食を通じて体験する。・タンザニアのアート「ティンガティンガアート」に挑戦する。それまでに得たタンザニアの知識をもとに、タンザニアの景色や様子を想像しながら取り組む。・学習したことの内容を「アフリかるた」として振り返る。

＜生徒の様子＞
・水を運ぶ人や食事の方法、食べている物等、タンザニアの人々の暮らしの学習に対して興味をもって取り組んでいた。体験学習では水を頭に載せて運んでみたい、実際にウガリを食べたいというような感想もあった。
・ティンガティンガアートでは「夕日と赤い土のあるタンザニアの大地を描きたい」「タンザニアの夜は暗いけど、星がきれいだと思う」等、タンザニアの様子を思い描きながら取り組む様子が見られた。
・「アフリかるた」と命名したカードゲームでは、タンザニアの学習のまとめとして得た知識を読み札としてまとめる生徒もいた。

＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開）＞・ティンガティンガアートはダイナミックな独特の色使い、ユニークな動物等、見た目がおもしろく障害の重度な生徒も軽度な生徒にとっても目をひくものであった。さらに、色の三原色の授業と合わせて行ったこと、ステンシルのようにして取り組めるようにしたり、絵の見本を用意したりすることで、どの生徒にとっても楽しみを感じながら取り組めるものであったと考える。・タンザニアの文化や伝統を「アフリかるた」として写真や絵を使って伝える方法はまとめの学習だけではなく導入として行うこともできると考える。

鈴木優成　千葉県立Ｆ特別支援学校　知的代替　　中学部３年

「昔からある日本の生活を体験しよう」

＜ねらい＞・日本について知り、昔からある日本の生活を体験することができる。

＜活動内容＞・外国と日本国旗や民族衣装、文字、言葉を比べ、日本の特徴などを知る。・昔からある遊び（こま、剣玉、お手玉など）を友達と一緒に体験する。・竹を使って、竹馬、竹ぽっくりを手作りし、友達と遊ぶ。・年賀葉書を買いに行き、自分達で年賀状を作って送る。・書き初めをする。

＜生徒の様子＞・日本と外国の民族衣装の写真や国旗を見たり、色々な言葉であいさつやじゃんけんゲームをしたりして日本と外国の違いに気付くことができた。自分達の住む日本について意識できた。
・昔遊びを体験することができた。遊びを体験し、自分達で道具を作りたいという意欲をもっていた。
・竹馬や竹ぽっくりを手作りするとき、友達と協力する様子が多く見られた。
・年賀葉書を買いに行く経験できた。購入後、祖父母などの家族や友達のことを思いながら、字を書いたり、ステンシルやシールを使ったりして、年賀状を書くことができた。
・書き初めは、とても落ち着いて書くことができ、何枚も書こうとする姿があった。

＜考察（インクルーシブ教育で活用できる教材、授業展開）＞障がいの有無や、学力やコミュニケーションの力に関係なく以下の活動では共に活動することができると考える。

相沢　友紀　東京都立Ｇ特別支援学校（病院内分教室・病弱）小学部３～６年

「なるほど・ザ・ワールド」案

＜ねらい＞　領域：総合的な学習の時間
○外国と日本を比べよう・・民族衣装の写真や国旗を活用して自分の好きな写真や国旗を選ぶ。
・興味をもった国のもの（貨幣や民族衣装、食文化など）を調べ、発表する。
色々な国の言葉であいさつをしたりをしたり、じゃんけんゲームに取り組む。

＜活動内容＞
○日本の生活の体験・・・・昔からある遊びを友達と一緒に遊んだり、道具を友達や教師と一緒に作ったりする活動。年賀状を書く活動。書き初めをする活動。
・スーツケースの中の「世界のモノ」から調べたい国のもの　どんな調べ方があるかお互いに発表し合う
・各自調べ学習をし、調べたことをもとに発表の準備をする。

公社）東京都教職員互助会

【本年度の考察】

特別支援学校、特別支援学級における７実践を行った。様々な発達段階の児童生徒が共に学ぶことや普通学校や普通学級と交流をもつこと、また、海外の学校との連携をはかることを通して、インクルーシブ教育に活用できる教材、授業展開について考えた。その際、昨年度の研究で、共に学ぶ授業作りのための工夫として導き出された「体験を伴う学習」「児童・生徒の縦割りグループ」「実物の使用」「教材提示の仕方（五感に働きかける）」の４観点を意識した授業作りを行った。

普通学校の児童との交流では、特に「体験を伴う学習」が、障がいのない児童にも分かりやすく有効であり、障がいの有無にかかわらず共に学びやすいことが分かった。また、海外の学校との交流では、生徒同士の直接の交流を深めるため、生徒の作ったビデオレターや自己紹介カードなどを交換するなど海外の学校の友達をより身近に感じることができる、交流している実感が持てることが効果的であった。(「実物の使用」）さらに、海外の学校との交流の準備のための活動では「児童・生徒の縦割りグループ」を作り、異学年の児童生徒が共に学ぶ機会にもなった。海外のアートを学習する実践では「教材提示の仕方（五感に働きかける）」を意識した授業を展開できた。２年目の研究成果を活用し、インクルーシブ教育に活用できる教材、授業展開についてさらに迫ることができたと考える。

今度の課題として、以下３点が挙げられている。

①「学習活動の継続性」である。海外の学校との交流では担当教諭の変更により継続が難しい場合がある。

解決策としては、交流活動を学校全体の経営計画に基づくものとすることやそれに伴う予算化、分掌化することが考えられる。また、ユネスコスクール認定校になることや交流が進み学校間交流として姉妹校提携できることなどが望ましい。

②「交流の機会の回数」である。学校間の交流の回数が決められており、交流を深める機会がさほど多くはないというのが現状である。教科・領域の授業時数との兼ね合いもあるので、単に回数を増やせば問題が解決されるというものではない。課題解決の方法としては、総合や道徳だけの時間だけでなく、教科学習での交流や生活単元学習での交流の可能性も模索したい。

③「参加型授業の展開の活用」である。国際理解教育や開発教育の授業では可能であるが、教科学習などの日常のカリキュラムの中で、参加型授業を展開する難しさがある。今後は、教科に絞って研究を進めることも必要になってくるのではないかと推察される。

これら課題については、今後も継続して実践に取り組む中で、検討をしていくこととなった。